

古詩十九首「去者日以疎」詩について

著者名(日)	増野 弘幸
雑誌名	大妻国文
巻	43
ページ	283-301
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00001285/

古詩十九首「去者日以疎」詩について

増 野 弘 幸

はじめに

漢代の古詩十九首「去者日以疎」詩の第三、四句目は次の様である。

出郭門直視 郭門出でて直視すれば
但見丘与墳 但丘と墳とを見るのみ

また末の二句は次の様になっている。

思還故里閭 故の里閭に還らんと思ひ
欲帰道無因 帰らんと欲するも道因る無し

古詩十九首「去者日以疎」詩について

ここでは、故郷を離れ、他郷にいる者が故郷を思う時、まず今いる城市の城門を出ることを述べた後に「思還故里閭」と故郷の門に帰りたいとする願望を述べている。

何故望郷の念を述べる時、門の出入りを述べる必要があるのだろうか。本稿では、この点を中心にこの詩について考えてゆきたい。

一

改めてこの詩の全体を示すと以下の如くである。

去者日以疎	去る者は日に以て疎く
来者日以親	来たる者は日に以て親しむ
出郭門直視	郭門出でて直視すれば
但見丘与墳	但丘と墳とを見るのみ
古墓犁為田	古墓は犁かれて田と為り
松柏摧為薪	松柏は摧かれて薪と為る
白楊多悲風	白楊悲風多く
蕭蕭愁殺人	蕭蕭として人を愁殺す
思還故里閭	故の里閭に還らんと思ひ
欲歸道無因	帰らんと欲するも道因る無し

ここでは、去る者は日ごとに疎遠となり、来る者は日ごとに親しくなまってゆく。城門を出て真つ直ぐに見ると、そこには小高い丘とそこにある墳墓とが見えるだけだ。元いた村里の門に帰ろうと思い、帰ろうとするのだが依るべき道は無い、と故郷に帰りたいが帰れない望郷の念を述べている。

冒頭の二句については、「去者」と「来者」の解釈については、「去ってゆく者」と「やって来る者」と解する説と「死にゆく者」と「生まれ来る者」とする説と大別して二説がある^②。後者は後の墓の句からの発想に依るもので、「死にゆく者」については、墓の部分とは通じるとしても、最後の望郷の念を言う部分との繋がりは考えにくく、「生れ来る者」については、その後の部分と全く関係が無いこととなる。従って、初めの二句と三句目以降との関連が薄くなってしまうのである。前者の説であれば、後述する如く、主人公は郷里を去って別の城市にやって来た者であることから、郷里を「去る者」と別の城市に「来た者」とで、後の部分との繋がりが良く、前者の解釈が妥当なものと思われる。

三句目以降の望郷の念を述べる部分では、まず今いる町の城門を出るという表現から始まっている。末尾では望郷を述べることから、この詩の作者は、今の城市に生来居住していたのではなく、何らかの事情で他の町から来て客寓していることが理解される。望郷の念を述べる時に城門を出てゆくのであるが、次章では、まず城門を出てゆく意味について考えてゆきたい。

二

中国の詩において城門を出るという詩は幾つか見られる^③。前掲「古詩十九首」の例と同様に、漢代の詩において望郷の念を述べるものとして「古詩」に次の様にある。

歩出城東門 歩みて城東門を出で

遙望江南路 遙かに江南の路を望む

前日風雪中 前日風雲の中

故人從此去 故人此より去る

我欲渡河水 我河水を渡らんと欲すれども

河水深無梁 河水深くして梁無し

願為双黄鵠 願はくは双黄鵠と為りて

高飛還故郷 高飛して故郷に還らん

ここでは城市の東門を出た者が江南への道を眺め、前日その道を去って行った昔なじみのことを思い、自分も故郷に帰りたいが川に橋が無いと同じく帰る術が無く、鳥になってでも帰りたいと望郷の念を述べている。

「長歌行」其二是次の様になっている。

茗茗山上亭 茗茗たる山上の亭

皎皎雲間星 皎皎たる雲間の星

遠望使心思 遠望心思せしめ

遊子恋所生 遊子所生を恋ふ

驅車出北門 車を駆りて北門より出で

遙觀洛陽城 遙かに洛陽城を観る

〈中略〉

竚立望西河 竚立して西河を望み

泣下沾羅纓 泣下りて羅纓を沾す

ここでは山上の亭で望郷の念を抱き、車を駆り城門を出た者が洛陽城の方を望み見て望郷の念に泣くことが詠じられている。

この様に城門を出て望郷の念を述べるという表現を持つ詩がいくつか見られるのであるが、当時の人々にとって「城門を出る」ことが何如なる意味を持っていたのであろうか。

三

古代の詩において、城門を出るという表現がどのような意味を持つのかという点について考えてみると、古くは、『詩経』邶風北門に次の様にある。

出自北門 北門より出づるに

憂心殷殷 憂心殷殷たり

終窶且貧 終に窶にして且つ貧なり

莫知我艱 我が艱を知る莫し

已焉哉 已んぬるかな

古詩十九首「去者日以疎」詩について

天実為之 天実に之を為せり
謂之何哉 之を何とか謂はんや

ここでは、北の城門を出て憂いに沈んだ者が、生活は苦しく自分の悩みを理解する者はおらず、天がこの様な状況にしたのだと天に対して自らの苦悩を訴えている。

この詩の門を出る表現について考えると、例えば『礼記』月令には次の様に述べられている。

季春之月、〈中略〉命国難九門、磔攘以畢春氣。

（季春の月、〈中略〉国に命じて九門に難し、磔攘して以て春氣を畢ふ）

春の終わりに都城の城門で追儺を行い、犠牲を城門に磔にして邪氣の侵入を防ごうとしている。また『史記』封禪書には次の様にある。

磔狗邑四門、以禦蠱菑。

（狗を邑の四門に磔し、以て蠱菑を禦ぐ。）

ここでは、秦の徳公が都城の四方の門に犬を犠牲として磔にし悪霊の侵入を防いでいるのである。ここで重要なことは邪氣の侵入は城門からのみ行われると考えられていた点である。

さらに、天子が天を祭る時には、城門の外である郊外に祭壇を設けて「郊祀」を行った。

例えば『尚書』金縢には次の様に述べられている。

秋大熟未穫、天大雷電以風。禾尽偃、大木斯拔。〈中略〉王出郊。天乃雨反風。禾則尽起。

（秋大いに熟し未だ穫せざるに、天大いに雷電して以て風す。禾尽く偃し、大木斯に抜く。〈中略〉王出でて郊す。天乃ち雨ふり風を返す。禾則ち尽く起つ。）

この様に、城門外は邪気等の存在する危険な場所であると共に、天との接触のとりやすい場所としての認識があったのである。当時の人々にとって、城門は宗教的観点からも内外を厳密に区別しているものとの認識があったのであり、それ故、『詩経』北門篇においても、城門外に出て自らの苦悩を天に訴え、現状の好転を願っているのである。

こうした城門内外を区別する認識は漢代にも引き継がれていた。「郊祀」は引き続いて行われると共に、後漢の『風俗通義』雄雞には次の様にある。

東門雞頭可以治蠱。

（東門の雞頭以て蠱を治むべし。）

ここでは、東の城門に供えられた鶏の頭が悪気を断つとするが、これは前出の『史記』封禪書の例と同様の発想で行われたものである。「封禪書」と同じく犬を使う漢代の例としては、『風俗通義』祀典にも、犬を城門に磔にすることが述べられている。

この様に城門内外を区別する認識が漢代にも引き継がれていたのである。この事に関わって、「去者日以疎」の詩の主人

公の設定についても考えておくと、例えば『文選』所載のこの詩の李周翰の注には次の様に言う。

或曰、人事迫笮、或遭乱国、故爾。

（或ひと曰く、人事迫笮、或いは乱国に遭ひ、故に爾り。）

ここでは、郷里に帰れないのは人的関係、若しくは国の混乱によるものであるとし、生きた人間が述べている設定と理解しており、この様な解釈を取るものが多い。清の呉淇は、王世貞の、異郷の客となっている者が述べたという、生きた者とする説を引いた上で、次の様に言う。

与上文照映处、却無意味。不如以思属死者。

（上文と照映せし处、却りて意味無し。思を以て死者に属せしむるに如かず。）

ここでは、初めの二句との関連で生きた者とするより死者が述べているものと解釈している。⁽⁴⁾

両説、いずれが正しいかについて考えてみると、『漢書』武五子伝広陵厲王胥伝に次の様にある。

嵩里召兮郭門閼、死不得取代庸、身自逝。

（嵩里は召して郭門に閼す、死は代庸を取るを得ず、身自ら逝かん。）

ここでは、皇帝への呪詛が発覚し、死を覚悟した劉胥の辞世の賦の中で、死者の山である嵩里から迎えが来て城門の所

で本人かどうか調べる以上、代理を立てる事は出来ず、私自身が行くしかないのだと述べている。

この様に、漢代においては、人が死ぬとその魂は城門から出てゆき、門の所で、冥界からの使者の確認を受けて冥界へと連れて行かれると考えられていたのであり、城門外が異界との接点であるという認識はここにも現れている。

この詩において死者の魂が門から出て故郷に行こうと考えるという解釈は当時のこうした認識からは考えにくく、従って、この詩の主人公は生きた者ということになるのである。

四

この様に城門の内外を厳格に区別する発想は、宗教的認識上、当時の人々に大きな影響を齎していたのであるが、現実世界においてはどの様であったか考えてみたい。

龍山文化以来、集落を城壁で囲むことが行われて来たが、その集落は氏族が単位となっており、周代になると宗法の下、宗族による纏まりが出来、人々は宗族に所属し、宗族の所有する耕作地を耕す生活を送っていた。また、宗族単位での課税が行われ、宗族構成員の公的な戸籍は無く、宗譜（族譜・家譜とも言う）⁽⁵⁾がその代わりとなっていた。春秋戦国期の混乱により宗族の耕作地所有が崩れ、土地の私有化が盛んとなり、宗族制が崩壊し、秦漢以降、家族単位での課税が行われ、人々は国家に直接属するようになってゆき、商業の発展と共に大都市への人口流入等、人々の移動も以前よりは多くなっていた。

徐揚傑氏によればその様な状況でも、多くの人々は元々の場所に住んでおり、それは宗族制以来の祖先を一にする子孫たちの集団であった。⁽⁶⁾常建華氏は、戦国期に破壊された周代の宗法は漢代に復活したと述べており、⁽⁷⁾陳英毅氏によれば、宗族制崩壊後も血縁宗法思想は弱まらず、特に漢の武帝の儒教国教化以来、血縁を尊重する觀念は強まっていたのである。⁽⁸⁾

そうした中、張汝宜氏によれば、夏王朝より作られて来た宗譜も時代と共に整備されてゆき更新が続けられ完全なものとなつてゆき、⁹⁾前出陳英毅氏によれば魏では九品官人法の依拠するものとなり、また、宗族の中で大地主となつた者が宗譜に基いて多くの族人を使役する様にもなつていったのである。¹⁰⁾

この様に前漢、後漢の時代、人口の流動化があつた中でも集落は氏族共同体としての機能を失つてはいなかった。『漢書』雋疏于薛平彭伝にある疏広伝には次の様にある。

既帰郷里、日令家共具設酒食、請族人・故旧・賓客、与相娛樂。

(既に郷里に帰り、日々家をして共に酒食を具設せしめ、族人・故旧・賓客に請ひ、与に相娛樂す。)

疏広が早くに官を辞して帰郷し一族の人々や友人らに酒食のもてなしをして日々楽しんだことを言う。

また、『後漢書』伏侯宋蔡馮趙牟韋列伝の韋彪の伝には次の様に述べられている。

彪清儉好施、禄賜分与宗族、家無余財。

(彪清儉にして好く施し、禄賜は宗族に分与して、家に余財無し。)

後漢の韋彪は大鴻臚にまで昇つたが俸禄等を族人に全て分けたと言う。

これらの例では故郷を出て官にあつた者が郷里に戻り、一族の人々にその富を分与しているのであるが、こうした行為について多賀秋五郎氏は、当時の知識人は宗族の親和に努めたと述べている。¹¹⁾

この様に、前・後漢期、折節に宗族間での親和、また、結束が図られ、周代から、多少の変化はあつたが、余り変わら

ず宗族としての連帯を持って氏族共同体としての集落は存在していたのである。

こうした共同体における城門はどのような意味を持っていたのであろうか。

周代の例を見ると、『史記』孫子呉起列伝の呉起の伝には次の様に述べられている。

呉起殺其謗己者三十余人而東出衛郭門。与其母訣、齧臂而盟曰、起不為卿相、不復入衛。

（呉起其の己を謗る者三十余人を殺して東のかた衛の郭門を出でんとす。其の母と訣れんとし、臂を齧みて盟ひて曰く、起卿相と為らざれば、復た衛に入らずと。）

ここで呉起は衛の城門から出る時、母親に誓いを立てて大臣にならねば帰国しないと述べているが、帰国のことを「入」即ち衛の城門の内に入るといふ表現を用いている。

『列女伝』貞順伝の衛寡夫人の部分には次の様にある。

嫁於衛、至城門而衛君死。保母曰、可以還矣。女不聽、遂入、持三年之喪事。

（衛に嫁して、城門に至るに衛君死す。保母曰く、以て還るべしと。女聴かずして、遂に入り、三年の喪事を持す。）

斉侯の娘が衛に嫁し城門まで来たところその夫が亡くなり、守役が帰国を勧めたがそのまま城門に入り妻として服喪したと言うのであるが、城門の出入が結婚の成否を表す重大な意味を持っていることを示している。

『呉越春秋』勾踐入臣外伝には次の様にある。

遂赦越王帰国送於蛇門之外。

（遂に越王を赦し帰国せしめんとして蛇門の外に送る。）

ここでは、呉王が越王を許して帰国させるため呉の越側の城門である蛇門の外迄送って行ったのであるが、ここでは、門外に出ることとその国の束縛から解かれたことを示している。

この様に、当時は門の出入が、その共同体への所属の有無を意味するものであったのである。

こうした認識は漢代にも引き継がれており、例えば前出『漢書』疏広伝には次の様にある。

上疏乞骸骨。上以其年篤老、皆許之。〈中略〉公卿大夫故人邑子設祖道、供張東都門外、送者車数百両。

（上疏して骸骨を乞ふ。上其の年の篤老なるを以て、皆之を許す。〈中略〉公卿大夫故人邑子祖道を設け、東都門外に供張し、送る者の車数百両。）

この様に疏広が官を辞して故郷に帰る時に皆が都の城門の所で送別の宴を開き、見送ったと述べられている。

また、『後漢書』逸民列伝の逢萌の伝に、次の様にある。

即解冠挂東都城門帰。

（即ち冠を解き東都の城門に掛け帰る。）

ここでは、王莽が自分の子を殺したことに憤った逢萌が冠を都の城門に掛けて官を辞し帰ったことが述べられている。

これらの例では、官を辞する時、城門がその境界となっているのである。

この様に、前・後漢期においても、その共同体に所属するか否かを周代と同様に、城門の出入により示しているのである。門を出る表現を持つ漢代の楽府に「東門行」がある。

出東門 東門より出でて

不顧帰 顧るを顧はず

来入門 来りて門に入り

悵欲悲 悵として悲しまんと欲す

盜中無斗儲 盜中に斗儲無く

還視桁上無懸衣 桁上を還視するに懸衣無し

拔劍出門去 劍を抜きて門を出でて去かんとすれば

兒女牽衣啼 兒女衣を牽きて啼く

〈下略〉

この詩は野盜になろうと東の城門を出た男が、思い返して家に戻り、改めて自宅の窮乏振りを見て、結局、妻子の引き止めも聴かずに野盜になることを決意するというものだが、ここでは城門を出れば野盜、戻れば真人間という間をさまよう主人公の姿が描かれ、そこには城門内ではその共同体の倫理を守らねばならないが、城門外では非道な行いも許されるところの認識があると言え、城門内ではその共同体の行動規範に拘束され、服従が義務付けられるが、城門外にはそれは及ばず、本人の意志・判断による行動が出来ると考えているということを示していると言えよう。

五

この様な観点から、前出の「去者日以疎」の詩をはじめとする望郷の念を述べる三首が、何故門を出る表現を伴っているのかという点について考えてゆきたい。

「去者日以疎」では城外の墓の存在でさえも消滅する様子を見て望郷の念を抱くことが述べられるが、事情があつて故郷から出て、他郷者として居住している共同体で故郷のことを思つて来た者が、城門を出て墓のあり方に触発され、望郷の念が強く出て来たものであると言える。

「古詩」では門を出て故郷への道を眺めるうちに望郷の念が起きている。「長歌行」其二では、冒頭四句は山の上でのことを言うが、城市内に山があるのは不自然で、第五句「驅車出北門」の後のことを言うか、別の機会に山に登った時のことを言うかと解釈すべき部分と思われるが、城門を出て初めて故郷への想いに浸り涙を流し、望郷の念を明確に示すのである。

こうした門を出て自らの思いを述べる表現を持つ漢代の詩は、望郷を言うものの以外にもあり、例えば「西門行」には次の様にある。

出西門

西門を出でて

歩念之

歩みて之を念ふ

今日不作楽

今日樂しみを作さざれば

当待何時

当に何れの時をか待つべき

ここでは西の城門を出て歩きながら、人生は短いのだからせめて今を楽しく生きるべきだと述べる。
また『文選』陸機「予章行」李善注所引の「上留田行」には次の様にある。

出是上留西門 出づるは是れ上留の西門よりす

三荊同一根生 三荊一根を同じくして生まるるに

一荊断絶不長 一荊断絶して長ぜず

兄弟有両三人 兄弟両三人有るに

塊摧独貧 塊摧独り貧なり

上留の西門から出て、兄弟三人中、年少の弟のみ貧しいことを嘆く。

この様に、門を出て行くことと自らの本心を述べることで連動しており、前述の城門内における共同体への所属とその秩序への従属を考えると、これらの例は、城門を出ることによって、居住する共同体からの精神的拘束が無くなり、自由に思いを致すことが出来る様になったために可能となった表現であると考えられよう。

「去者日以疎」の詩では、末二句に「思還故里閭、欲帰道無因」とある。帰れない事情については、前出『文選』李周翰の注の如く、元の共同体との人的関係、若しくは国の混乱によるとするものと、元の劉履の如く「此則客遊遐遠、思還故里、日与生者相親而不可得（此れ則ち客遊すること遐遠、故の里に還らんと欲ふも、日々生者と相親しみて得べからず）」と居住している共同体との関係が緊密である故に帰れないと解するものとに分かれるが、詩の本文中で「道無因」すなわち帰郷への道筋・方法が無いと、帰り方自体に焦点を当てた言い方になっている以上、李周翰の如く、帰るに帰れない状況にあると解する方が妥当であろう。

また、前引の如く李周翰は「郷里に帰れないのは人的関係、若しくは国の混乱によるもの」とするが、饒学斌は次の様に述べている。

当衰邁之年、処竄逐之地、思還無因。

（衰邁の年に当たり、竄逐の地に処り、還るを思ふに因る無し。）

ここでは、老年に至って、追放された遠い地に居ると解している。⁽¹³⁾

さらに冒頭の「去者日以疎」の句では、郷里を去っていった者がその郷里と疎遠になると、自分と郷里の関係について述べている点から、「国の混乱」というよりはむしろ郷里との「人的関係」による帰郷困難を述べていると解することが出来るのであろう。

従って、この詩の主人公は何らかの事情で元の共同体に居ることが出来なくなり、今の城市に移動して来たと考えられるが、城門を出ること、居住する共同体の心理的拘束が外れ、自分自身の思いを自由に述べられる様になり、さらに目前に展開する、墓さえも時間がたてば壊されてしまうという現実によって、望郷の念が一層強まり、城門外という拘束なき状況の中、その気持ちを素直に述べたということになる。

六

その様な中で「思還故里閭」の句が述べられるのであるが、何故、墓が壊されることと、「故の里閭に帰りたいと思う」ことが関連しているのだろうか。

「里閭」については、『説文解字』里部に「里、居也（里は、居なり）」とあり、また、同書門部に「閭、里門也（閭は、里門也）」と述べられており、これに基けば「里」は以前居住していた村里、「閭」はその門と解され、隋樹林をはじめ、この解釈を用いるものが多い。⁽¹⁴⁾ 当時の集落は城市と同様、土墻等の壁に囲まれ、門から出入りする構造であった。宮崎市定氏は、城市の中の区画で更に周囲に城壁を巡らした一単位を「里」と呼び、そこに出入りするための門を「閭」と言うとし、そこは王族の住む里の裏に庶民の住む里もある様な居住形態であったとする。⁽¹⁵⁾

いずれが正しいか俄かには判断し難いが、宮崎氏も「里」には宗族が団結して住むこともあったとし、一つの共同体的単位であった点は、独立した集落と変わらないであろう。日比野丈夫氏は、「里」は郷村の聚落を指すだけでなく、城市内の一定区画を指すと述べ、「里」には両義あることを指摘しており、⁽¹⁶⁾ ここでは多くの説にある如く「故郷の村里の門」と解しておきたい。

この詩の主人公は「里の門」に帰りたいと述べているが、今まで述べて来た様に、元いた共同体への帰還を望む表現である。これは三句目の門を出る表現に対応したもので、門を出ることで現在の共同体から離れることを示し、門に入ることで元の共同体に帰還することを示すのである。

帰還への願望は、墓が耕され、畑になってしまふ光景に触発されて述べられているが、前述の如く当時の集落は氏族共同体の形を残しており、宗譜の整備が行われていた。宗譜の存続と同様に、戴均良氏が述べる如く漢代も祖宗廟において祖先への崇拜が広く行われていた。⁽¹⁷⁾ 詩の主人公は移住先の共同体では「客」即ち、他郷者の身の上であり、こうした人物が亡くなった場合について饒学斌は次の様に言っている。

一旦溘逝、数片骨頭、更不知抛露於何所。

（一旦溘逝すれば、数片の骨頭、更に何れの所に抛露さるるかを知らず。）

ここではその様な人物は、死んでしまえば何処かに骨が投げ捨てられてしまうと言うが、⁽¹⁸⁾この様に、元から共同体にいた者の墓でさえ畑となるのに、まして自分は他郷にある身で、その死後の扱いを想像しそれに悲哀を深く感じての望郷の念であり、それは、自分の死後、きちんと弔ってもらいたいという願いでもあったのである。元の共同体では宗譜に名を連ね、祖廟にてきちんと祀られる筈であった。

主人公は、この事を考えたのであろうが、前述の如く、何らかの問題により、故郷の共同体にすることが出来なくなってしまうため、今の城市に移住したのであった。

氏族共同体で問題を起こした者への対応としては、前引、饒学斌が「処竄逐之地（竄逐の地に処る）」と指摘する様に、元の共同体からは追放されることもあったと考えられる。瀬川昌久氏によれば、香港の例では、宗族の掟に嚴重な違反をした者は宗譜から名前を削除の上、「出族」即ち追放の処分がなされる。⁽¹⁹⁾また、中生勝美氏によれば宗族祭祀集団からの排除は広東省各地にも見られ、より厳格な場合、族内裁判による追放も行われる。⁽²⁰⁾従って、そうした者は宗族からの祭祀を受けることが出来ないのである。

これらの例は現代のものではあるが、宗族の連帯の強かった漢代にも饒学斌の指摘の如くこうした事例はあったと考えられよう。

この様に、「道無因」とするこの主人公は故郷の集落に戻ることが出来ず、従って死後の祭祀を受けることも出来ないままとなってしまうことを予感することで、より強い悲しみを感じるようになるのである。

古詩十九首「去者日以疎」の詩は、帰郷の叶わぬ者が、当時の人々に強くあった城門内外の区別の意識に基いた城門の出入の表現を用いて、その果たされぬ望郷の念を述べた詩なのである。

注

- (1) 例えば清の朱筠「古詩十九首説」(『嘯園叢書』第五函)に「去者自去、來者自來。今之來者得与未去者相親。後之來者、又与今之來者相親。昔之去者已与未去者相疎。今之去者、又与将去者相疎。」とある。
- (2) 例えば『文選』所載のこの詩の五臣注で李周翰は「去者謂死也。來者謂生也。」と述べる。
- (3) この点については以前論じたことがあるが、設論の關係上、この事にも触れながら論じてゆく。拙稿「『詩経邶風北門篇』における「門」の意味について」『大妻国文』二二、「漢代の詩における「門」について」『中村璋八博士古稀記念東洋学論集』(汲古書院、一九九六年)参照。
- (4) 呉淇『六朝選詩定論』卷之四。
- (5) 徐揚傑『中国家族制度史』(人民出版社、一九九二年)五二〇―五三頁。
- (6) 徐揚傑前掲書一六〇―一六三頁。
- (7) 常建華『宗族志』(中国文化通史第四典、制度文化典)(上海人民出版社、一九九二年)二三六―二四三頁。
- (8) 陳英毅「中国族譜的產生和發展」『中国族譜与地方志研究』(中国科学技術文献出版社、二〇〇三年)。
- (9) 張汝宜「神秘種族生命密碼之文化探微」『中国族譜与地方志研究』(中国科学技術文献出版社、二〇〇三年)。
- (10) 陳英毅、注(8)。
- (11) 多賀秋五郎『中国宗譜の研究』上卷(日本學術振興会、一九八一年)五二頁。
- (12) 劉履「選詩補註」一(『風雅翼』卷二)。
- (13) 饒学斌「古詩十九首詳解」(『古詩十九首集釈』(隋樹森編、新華書店、一九五五年)。
- (14) 隋樹森『古詩十九首集釈』卷二、箋注(新華書店、一九五五年)二十一頁。
- (15) 宮崎市定「中国における村制の成立―古代帝国崩壊の一面―」『宮崎市定 アジア史論考』中卷(朝日新聞社、一九七六年)。
- (16) 日比野丈夫「郷亭里についての研究」『東洋史研究』一四―一・二。
- (17) 戴均良『中国城市發展史』(黑龍江人民出版社、一九九二年)一三七頁。
- (18) 饒学斌、注(13)。
- (19) 瀬川昌久『族譜―華南漢族の宗族・風水・移住―』(風響社、一九九六年)二二頁。
- (20) 中生勝美「広東省の宗族と祖先祭祀」『上智史学』三〇。